## 荘（しょう）地区を訪ねる

# 史跡めぐり歩こう大会

《と　き》平成 28 年 5 月 15 日（日）
◎受付時間：９時 00 分～9 時 30 分
◎出　　発：９時４５分　◎帰着：１２時００分頃の予定

《ところ》荘中学校クラブハウス

《コース》古代、中世の史跡を中心に荘地区にある史跡を見学します。
歩く距離は、約５キロです。

【史跡ポイント】
①西の港（湧水）　②田の神・火の神　③道真公の手洗い石　④道真公の腰掛石
⑤七社神社　⑥山伏石像　⑦生松天満宮　⑧安楽寺跡・宝篋印塔　⑨荘貝塚

薩藩名勝志より（生松天満宮）

# 荘地区史跡めぐり歩こう大会マップ

## １　荘地区の概略

荘地区は、高尾野川と野田川に挟まれた扇状地の扇端部に位置しています。この地域に人々が住みはじめた最初の記録は、荘貝塚に見ることができます。この貝塚から出土した土器は轟式土器と呼ばれ、縄文時代前期の約 6000 年前に使用されていたことから､既にこの地域に人々が暮らし始めていたことが分かります。

その後、建久 8 年（1197）に書かれた薩摩国図田帳に「山門院二百町内 嶋津同（御カ）庄寄郡 老松庄二十四町四段安楽寺」とあり、平安後期以降鎌倉時代にかけての行政区である山門院（現在の高尾野・野田を中心とする地域）に、安楽寺領老松庄（現在の荘地区）があったことが分かっています。安楽寺は、菅原道真を弔うために建てられた太宰府天満宮の神宮寺であり、平安時代末期には九州各地に多くの荘園を領しており、当時の荘地区は安楽寺の荘園でした。

老松庄の老松とは太宰府天満宮の末社である老松の名称をつけたものです。

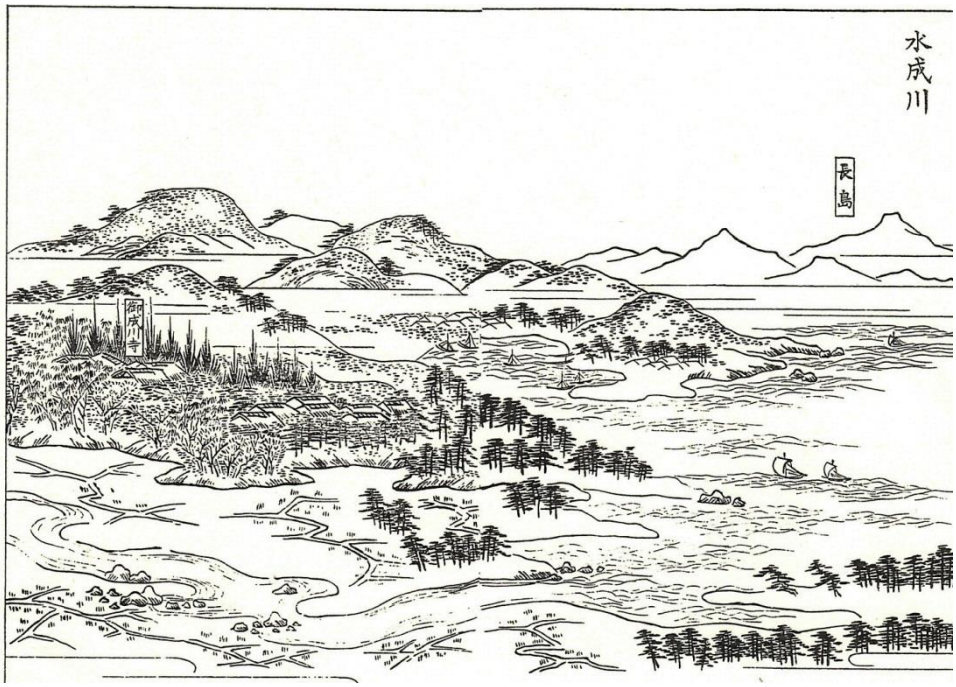
安楽寺が領した荘園の特徴は､交通上の要衝や交易拠点を荘園化していることから、荘地区が当時交通の要であったことが伺えます。

その後、荘園制度が崩壊する過程の中で荘地域も徐々に武士が治めるようになります。山門郡司家の系図の中に菓成河領主税所敦光妻とあり、菓成河が現在の荘小学校付近と推定されることから安楽寺領の中に武士の領地が見られるようになり、やがて菓成河は山門郡司一族から島津氏の家来であった本田氏の所領となり、島津用久が 1425 年に薩州家を興すとともに薩州家の支配となったと考えられています。

江戸時代になると、旧薩州家の領地であった地域は高城、阿久根、高尾野など分割され、荘地区は出水郷に属する地域となりました。この頃になると薩摩藩では、農業生産の増大を目的として新田開発に力を入れ、元禄元年（1690）に遠浅の地形を利用して庄新地ができました。その幕末の慶応二年（1866）に庄潟新地等が完成し、その後の干拓等で現在の形になりました。

## 2　各史跡の解説

### ⑴　西の港




江戸時代末期の荘地区の様子「三国名勝図絵」から

現在は、元禄、慶応の干拓で陸地となっていますが、江戸時代以前は海に面していました。「三国名勝図絵」老松天満宮の項に「此神祠は、水成川の海口に臨む、海口を庄津と呼ぶ」とあります。「津」とは、船着き場、港を意味しています。

平安時代末期から鎌倉時代にかけて、この周辺は安楽寺領であり、安楽寺の領地が交通の要所に多いこと、港の西側に島津氏薩摩支配の出発点となった木牟礼城があること、また、西回り自動車道の建設に伴う中郡遺跡の発掘調査の出土遺物に中国から輸入された青磁・白磁の他、13 世紀から 14 世紀頃に中国の景徳鎮窯（けいとくちんかま）で作られた青白磁で当時高級な品であった龍首水柱（りゅうしゅすいちゅう）が出土していることから、庄津は中世に主要な港として機能していたと考えられます。

## ⑵　田の神、火の神

田の神は、農作物の豊作をもたらし、干ばつや水害などの災害を除いてくれる神様として薩摩藩領内に多く残っている石像です。「秋葉大明神」は火の災害を防ぐ神様として各地に祀られています。

## ⑶　道真公の手洗い石

## ⑷　腰掛石

菅原道真公は、平安前期の貴族・学者であり、宇多天皇に仕えて信任を受け文章博士・蔵人頭・参議などを歴任しました、８９４年に遣唐使に任ぜられましたが、その廃止を建議しました。醍醐天皇の時代に右大臣となりましたが、９０１年に藤原時平の讒言により大宰権帥に左遷され、９０３年に大宰府で亡くなりました。

しかしながら、荘や薩摩川内市東郷の藤川には道真公が落ち延びた話があります。

江戸時代後期の天保十四年（1843）に編纂された「三国名勝図絵」の老松天満宮の項に「土人の説に菅相公嘗て庄津へ来り、船を繋ぎ暫く留滞し給ふといへり、社邊に御手洗川といへるあり、此川に腰掛石といふ石ありて、今に残る・・・・」とあります。

言い伝えによれば、道真公が上陸した場所がこの手洗い石の場所であり、追

手を逃れるために身をひそめる場所を探し、ひっそりとたたずむ民家に駆け込んだと言われています。その家では、年配の夫婦がムシロを織っていましたが、家に入ってきた一行の気品のある容姿を見て、何かいわくありげに見え、織りかけのムシロを機から外し、それに一行を座らせました。一行がことの次第を話すと、夫婦は大きくうなずき、巻ムシロのすだれを入口に掛け、寝ているように見せかけ、一行を座敷の奥に招き入れて追手の通り過ぎるのを待ちました。

幸い追手はこの家を探索することなく、ホッと安堵した一行に主人はお茶を出しました。お茶請けとして焼味噌を添えて出しながら、「この地では焼味噌をお茶請けとして毎朝三杯ずつ飲んでいます。こうするとその日の災厄を免れるという伝説があります。」と話しました。

荘では、今でも朝茶三杯の習慣を守っているところがあるそうです。

その後、道真公一行は、しばらくの間この地で旅の疲れをいやし、難を逃れようと考え、少し奥まった所に庵を立てて住むことにしました。現在の生松天満宮がその場所であるといわれています。

道真公は、こうした身の上であっても、都に残してきた妻子を思い、朝な夕な家族の安泰を祈っていました。道真公は、海辺に出ては、遠くの都の方を眺め物思いにふけっていつまでも石に腰かけていました。この石が腰掛石といわれています。

やがて道真公は南をめざして旅を続けたということです。

## ⑸　七社（しちしゃ）神社

明治時代の神社明細帳によると島津家の始祖である忠久公が鎌倉から下向し木牟礼城を築いたときに創建したものといい薩州家の義虎公も折りにふれて参詣したとされています。宮守りは代々「七社屋敷三右衛」が務めたとされています。

## ⑹　山伏石像

この石像は、貞享五年（1688）に建立された山伏の姿を模した石像です。作者は、春日尊壽印春教で修験者山伏の所持品等を良く表しており、修験道研

究に貴重な存在であることから、昭和六十三年に市指定文化財になりました。

春教は、石像に「飯隈山同行」と記されていることから飯隈山飯福寺（曽於郡大崎町）を中心に修行をしていた山伏であるとされています。

修験道とは、役小角（えんのおづの）を祖と仰ぐ仏教の一派で中世に天台系の本山派と真言系の当山派が確立しました。

## ⑺　生松天満宮

生松天満宮の祭神は、太宰府天満宮と同じ菅原道真公です。神社の創建は、永承年間（1046～1047）位と考えられており、この地は、太宰府天満宮の別当寺であった安楽寺の荘園であったことが薩摩国建久図田帳に記されているから 12 世紀には既に存在していたと思われます。

三国名勝図絵にある神社の記録では、道忍（どうにん）公（島津久経：島津氏 3 代）の頃に衰退していた神社を再興、その後、寛永二十年（1643）に火災に遭いましたが、慶安二年（1649）に出水地頭であった山田昌巖が再建したとあります。また文政五年（1822）にも火災に遭い、御神体も焼けたと思われましたが、寶殿から電光の如く火の勢いを吹き飛ばし、御神体を助け出すことができたとあります。翌年には再び荘の人々によって再興されました。

現在も荘地区の皆様に大切に守られています。

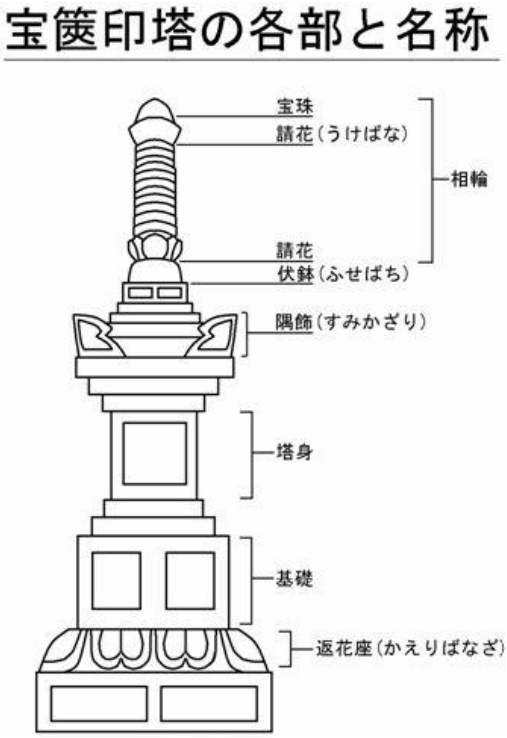
## ⑻　安楽寺跡・宝篋印塔

宝篋印塔は、もともと宝篋印陀羅尼という経を納めた塔です。

呉越王の銭弘俶（929～988）が作った八万四千塔が日本に伝わり後に供養塔・墓碑塔として建てられるようになり、鎌倉時代以後に一定の形式が確立しました。

この宝篋印塔の建立年は永和四年（1378）で建立者は圓昭とあります。

荘地区に安楽寺があったことは、文献の記録は見当たりませんが、安楽寺と記された平板が残されており（現在消失）、荘地区の安楽寺が太宰府天満宮安楽寺の別院であったと説明板にあります。



## ⑼　荘貝塚

荘貝塚は、高尾野川と野田川に挟まれた洪積台地の北縁部の荘中学校の東斜面にあります。遺跡は昭和四十三年に出水高校考古学部ＯＢの戸崎和弘氏が発見し、池水寛治氏が現場を踏査した結果、縄文時代前期の轟式土器を主体とする貝塚であることが判明しました。

その後、昭和四十八年・昭和五十三年、昭和六十一年三次にわたり行われました。

遺物は、轟式土器を中心に双角状石器、使用痕のある剥片石器や装飾品のヒスイ製の耳飾りなどが出土しています。